

文献調査から分かった東京のカメ類の分布変遷

岩本愛夢・片岡友美・佐藤方博

認定 NPO 法人生態工房

Chronological change of the distribution of freshwater turtles in Tokyo clarified by literature survey.

By Aimu IWAMOTO, Tomomi KATAOKA, and Masahiro SATO

NPO Eco-works

近年、本州に分布するニホンイシガメやニホンスッポンなどの在来種は平野部で急激に減少し、地域によっては絶滅が危惧されている。在来カメ類の減少要因としては、生息地となる水辺の減少や水質悪化、乱獲、アライグマなどの捕食者の増加、外来カメ類の侵入などが考えられている。これまでにこれらの要因は経年的に複合的に影響し、現在ではいずれの要因がいつ頃大きく影響していたのか、推測することが困難になっている。このため、在来種の減少傾向が顕著な東京都内を対象として、淡水性カメ類の年代ごとの分布の変遷および時系列による各種の消長を明らかにし、在来種の減少時期とその要因を推測した。都内の公立図書館で、区市町村史、自然環境報告書、民俗学的な資料集などから都内のカメ類に関する明治時代以前の記載を収集し、10年代ごと、自治体ごとに生息記録をまとめた。

収集した文献 2543 編のうち、93 編に 11 種のカメ類の記載があった。最も古い記載は 1820 年代で、そこから 1950 年代までの各年代のカメ類の記載文献数は 0 から 4 編で非常に少なかった。しかし、1960 年代以降、文献数は増加し、最も多かった年代は 1990 年代で 26 編だった(図 1)。

各種の年代ごとの記載状況については、ニホンスッポンは 1820 年代から記録があり、ニホンイシガメは 1890 年代が最も古い記録であった。ニホンイシガメはその後 1990 年代頃から、記載された自治体数が減少し、分布が縮小している可能性が示唆された。一方、外来カメ類は、クサガメが 1960 年代から、ミシシippia アカミガメが 1970 年代から、カミツキガメ等のその他外来カメ類が 2000 年代から記録があった。特にミシシippia アカミガメは 1990 年代から記録数が急増していた。こうした傾向から、東京都内では在来カメ類の分布の縮小は 1990 年以前からで、都市化による水辺環境の悪化や外来カメ類の侵入とも関係している可能性が推測された。今後、より詳細な地域ごとに各種の分布変遷を比較し、減少要因を探る必要があると考える。

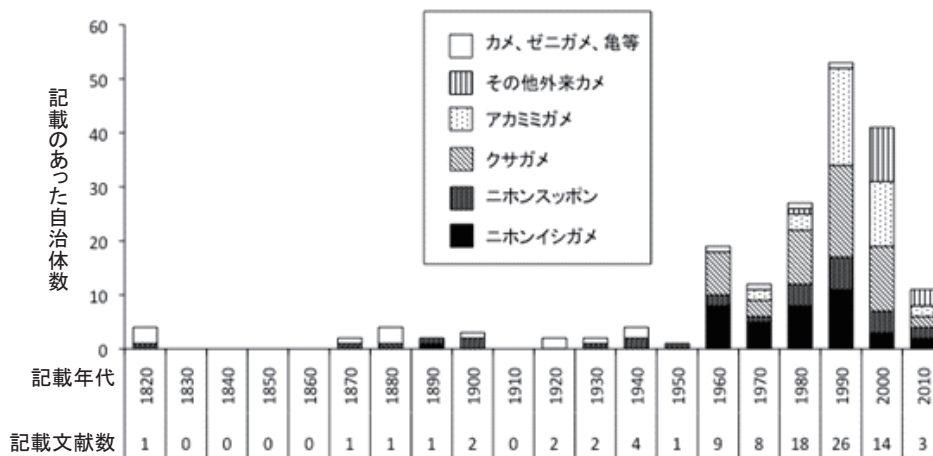


図 1. 各種の生息が記載された年代と記載のあった自治体数
縦軸はカメの生息記載があった場所・地域の自治体を1単位として数え、種ごとに自治体数を集計した。横軸の上段は生息が記載された年代、下段は年代ごとの文献数を示した。凡例□: 種名ではなく、カメ、ゼニガメ、亀、亀類、緑毛亀(みのがめ)、という記載をこのグループにまとめた。